



地球温暖化について

「瑞穂の地、日本列島は、自然災害列島でもあります。年間2000ミリ近くの雨量がありますので温暖湿潤型気候に区分されています。従って北半球の中緯度としては、雨量が多い方です。湿帯モンスーン地帯の特徴として梅雨期があり台風の通り道でもあります。昔から日本人は自然災害に苦勞してきました。地震、津波は別として毎年定期的に風水害の危機にさらされています。」

日本列島はアジア大陸の東側に横たわり、太平洋と大陸の境界に位置しています。それで日本近海はシベリア気団（大陸性寒気団）と小笠原気団（海洋性暖気団）との全く性質の異なる気団が接しているところにあります。気候の変わり目で、気団の勢力が入れ替わる時、そのせめぎ合いでなかなか簡単にいかず、他の気団（オホーツク海気団、揚子江気団、赤道気団）なども関係してくるので冬と夏がすんなりと入れ替わるわけではありません。その間、隙をぬって梅雨（梅雨前線）や秋雨（秋雨前線）や台風の時期がやってきます。シベリア気団はもともと乾燥して冷たいのですが、日本海を渡ると急に変質して、下から温められて不安定になり水分も補給される

ので、日本列島に突き当たって上昇すると裏日本に多量の雪を降らせ、山を越えると雲はなくなり好天をもたらします（フーン現象）。前号でも述べましたが、空気中の水蒸気は潜熱を出したり吸収したりしながら、その時々で天候を自在に操って回るので、自然の様相も様々な形になるのです。水害、風害（竜巻）など今年は特にひどかったような気がします。

報道によると、最近エルニーニョ現象が起きていると聞きます。エルニーニョ、ラニーニャの現象が起けると、地域全体の海水の温度に影響するので、日本では暖冬、冷夏、猛暑、豪雪、豪雨など気候が荒れるといわれています。最近暴風（竜巻、豪雨による災害が多いような気がします）ですが、台風や梅雨の雨には日本人は昔から耐えてきました。梅雨の長雨は乾いた土地に十分に水をしみ込ませ、地下水をため込むのです。夏の強い日差しを受け光合成を盛んにし、稲穂がはち切れるほどでんぷんを合成して米を生産します。これには水と光が必要です。毎日川の水が干しあがるほど水を吸い上げています。このとき梅雨時の水を地下に貯金しているので稲が実るまで持ちこたえることができるのですが、地下水が不

足するとだんだん川の水も干しあがってきます。8月末～9月に雨が全く降らないと、干ばつの危機がやってきます。その時の救いの神が台風なのです。台風は太平洋の南西部で多量の水蒸気を巻き上げながら北上し8～9月に日本に近づいてきます。台風の進路によってはひどい風水害をもたらしますが、その反面かけがえのない水の恩恵ももたらすのです。「豊葦原の瑞穂の地」と神代の時代から言われてきたのも、日本列島がモンスーン地帯に位置し、宿命ともいえる梅雨や台風の被害に耐えてきたからこそだと思います。これからいろいろな天災の被害を少なくするよう知恵をしばづいていかなければなりません。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡

5

大田 幸博

（元・菊水町史編纂委員会副委員長）

調

査は、単郭形式の城跡を二周しました。今回は、I郭北東側のⅨ区を説明します。

Ⅸ区 この区画は、西縁に土塁と帯状削平地の仕切りがあり、中央部に、幅広の帯状削平地が連なります。そして、東側は、V字形の小谷を挟んで、土塁の形をしたⅢ区（痩せ馬地形）が壁をなして下つています。I郭の縁からⅨ郭を眺めますと、いかにも、城跡地という感じがします。

土塁は、標高65m～70mの地点にあり、幅1.5m～5m、長さ22m、西下に帯状削平地があり、それから絶壁となります。土塁の端下には、標高63m～65mの間に、舌形状の小段（長さ8m、最大幅6m）が付いています。土塁上で、足場を確保するためののでしょうか。

西縁の地形は、小段下から、丘陵の斜面部を造成した細幅の帯状削平場に変化します。標高55m～61mの間にあり、幅1.5m～4m、全長36m、大走りのように見えます。そして、端部は、高さ約50cmの小山となり、末端尾根筋が極端に括れて、標高52.8mまで下ります。この地点に立てば、周りは絶壁で足がすくみます。中央部の帯状削平地は、9段あって、

標高58m～73mの間に連なっています。2段目は、最大幅7m、全長31m。高低差は、1段目と2.3m、3段目と1.9mあります。その中で、特に、8段目には、大穴が残っています。上場は、長さ10m、幅6.5m、深さ2.4m、井戸の役目を果たした貯水池跡と考えられます。町内では、日平城跡・江栗城跡に、同じような大穴が残っています。下位の10段と11段は、二股の東側・末端尾根に繋がっています。

Ⅱ言 玉名市の文化課長をしていた西田道世さんが、現場見学に来ました。その時の会話です。

（大田）この城跡は、隠し砦と思われる。集落よりも低い場所にあり、戦いの時は、領主が領民と共に逃げ込んだ。

（西田）敵から分り難い場所であり、とても逃げ込みに適していると思う。

（大田）元来、城は「逃げ込む」ための役目を持っていた。中国の古代山城では、敵が来るまで、王と領民が、数ヶ月、山城に籠ったと伝えられる。日本の場合、地方の小競り合いであり、数日間の籠城で、済んだと考えられる。

（西田）逃げ込む建物は、どんな構造だったのだろうか。

（大田）寛永14年（1637）に起こった

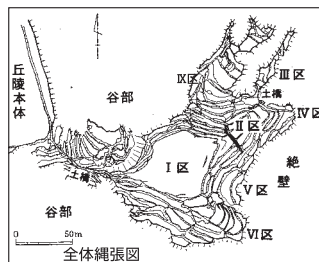
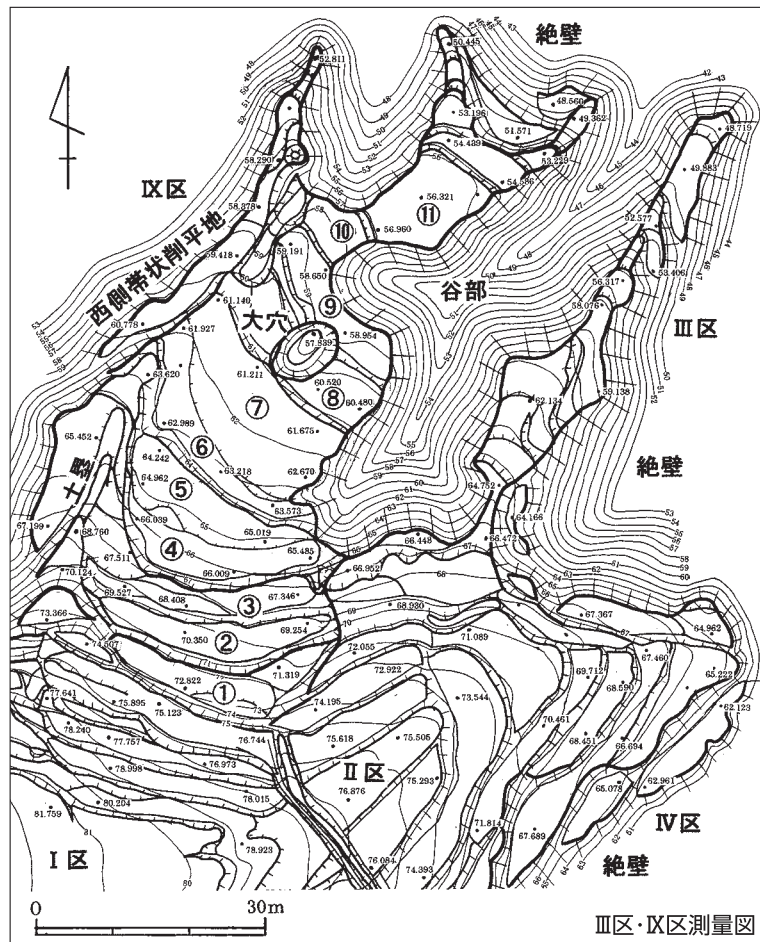


写真:⑧段目の大穴

「天草・島原の乱」では、キリシタン勢が、島原の原城（廃城）に逃げ込んだ。その時、空堀に屋根をかけて、仮住いとした。籠城の建物は、この程度であったと考えよう。

（西田）この城跡の周りは、絶壁である。地形そのものが城郭で、驚いた。